

ろんだん  
佐賀



岩永 雅也さん

放送大学長

いわなが・まさや 1953年嬉野町生まれ。就学前に千葉転居。筑波大附属高—東京大卒—同大学院修了。大阪大、放送教育開発センターを経て2000年に放送大学教授、21年から放送大学長。専門は教育社会学。チョウ、馬、自転車、農作業など趣味は雑多。千葉市。

読者の皆さんが本稿を目にされている今、おそらく米大統領選挙の勝敗は決しているだろう。しかし、選挙や政治についての門外漢である私には、現時点で結果を予想したり米国内政治の今後を論じたりすることなど不可能なので、この機会に選挙そのものではなく少し違った視点から思うところを書いてみたい。

米大統領選挙にメディアが明確に大きな影響力を持つようになったのは、1960年のケネディとニクソンのテレビ討論からだといわれている。討論の中身とは別に、若々しく見栄えのするケネディに対して年寄りじみたニクソンが劣勢と見られ、それがケネディの圧勝を呼んだとされている。しかし、それをラジオで聞いた人々への調査ではニクソンの勝ちという回答が

イドラに満ちた情報の海

多数であった。つまり、映像は討論内容を超えて強い影響力を持ち得たのである。

それから64年後の現在、再び米大統領選挙が佳境を迎えているが、1960年当時とは大きく異なっている点がある。それは主要なメディアであったテレビ放送がインターネットに取

とは可能であり、多くの人々が大きな関心をもってそうした情報を主に日本語版で視聴していたことは想像に難くない。

調査によると、現代人(特に若者)は新聞どころかテレビさえも見るのがなくなり、ほぼすべての情報源がスマホやタブレットだとい

にサムネイル(見本画像)の上位に載るため、「皆同じ関心や意見を持つている」と勘違いさせる傾向がある。それが今回のような有権者の分断的な対立関係を助長する主要因ともなっている。

英国の経験主義哲学者フランシス・ベーコンは、「知

で井の中の蛙(かわず)的に形成される「洞窟のイドラ」、人々の交流が作り出す噂話や根拠のない情報である「市場(いちば)のイドラ」、そして権威や力リスマによって声高に語られる「劇場のイドラ」である。とりわけ、今回はウェブ上で「市場のイドラ」や「劇場のイドラ」が飛び交っている。国民を二分する大統領選挙のように大きな課題や危機に直面したときには訳知り顔をした耳に馴染む危険なイドラが跳梁跋扈する。イドラに満ちた情報の海: 私たちはこれまでになく難解で危険な情報世界に生きているのではないだろうか。

佐賀から見える世界

て代わられたことである。有権者たちは全国ネットのテレビ番組ではなく、いつでも見たいところで視聴できるウェブサイトやSNS等で関連する情報に一日中アクセスし続けた。もちろん、インターネットの特性から、米国内だけではなく、日本からもそして佐賀からもそれらにアクセスするこ

う生活をしているらしい。常に中立性や信頼性がチェックされる公共の放送と異なり、それが難しいネット情報には「嘘でも言った者勝ち」という特性がある。さらに、ネットのニュースサイトなどでは、自分が過去に検索した回数が多い分野の情報やよく閲覧する偏った意見広告などが優先的

は力」、つまり知識や情報は多ければ多いほど事物を理解する力になると言明した。ただし、知識や情報には怪しいものも多い。それを彼は「イドラ(偏見、誤った知識)」と呼び、排除すべき4種をあげている。つまり、人間に特有の感覚の偏りや錯覚による「種族のイドラ」、狭い集団の中

「劇場のイドラ」が飛び交っている。国民を二分する大統領選挙のように大きな課題や危機に直面したときには訳知り顔をした耳に馴染む危険なイドラが跳梁跋扈する。イドラに満ちた情報の海: 私たちはこれまでになく難解で危険な情報世界に生きているのではないだろうか。

